

ほろほろわかやま



巻頭
特集

餅まきの聖地

— 春も秋も正月も —

散策

ものづくりat和歌山

わかやま魅力発信人

I♥WAKAYAMA 私の和歌山

ポツポみちをゆく -有田川町-

ハレの日を彩る印染の世界 -そめみち染物旗店-

西尾香織さん ~産地で継承「和歌山の底力」~

人が集い、想いを紡ぎ、新しい流れをつくるまち

餅まきの聖地

—春も秋も正月も—

和歌山は、全国でも特に餅まきが盛んな土地柄だ。作物が実れば投げ、家が建てば投げ、年が明ければ投げる。「餅まきの時だけお母さんが怖かった」「開催されると聞けば、近所のおじさんがよその郡まで出かけて行った」。そんな思い出を持つ人も少なくないのではないか。今回は、そんな聖地・和歌山のこれまでと現在をご案内。



正月の餅は1000年前から

平安時代の古典『源氏物語』げんじものがたり初音の巻には、正月の祝について、「菌固めの祝して、餅鏡をさへ取り寄せて」と記されている。正月の行事に鏡餅を供えたということ、この時代にはすでに「めでたい時は餅」のイメージが出来上がっていたようだ。

では、そのなかでも特ににぎやかな行事である餅まき、

あるいは餅投げは、いつごろから盛んになったのか。はつきりとしたことはわからないが、もともとは災いを払うための神事だったのが、江戸時代ごろに庶民の間にも広まっていっただけらしい。

江戸時代の共通認識

粉河寺に伝わる「粉河寺御池海岸院本尊縁起」こかわでらみ（18〜19世紀）は、粉河寺の筆頭の坊

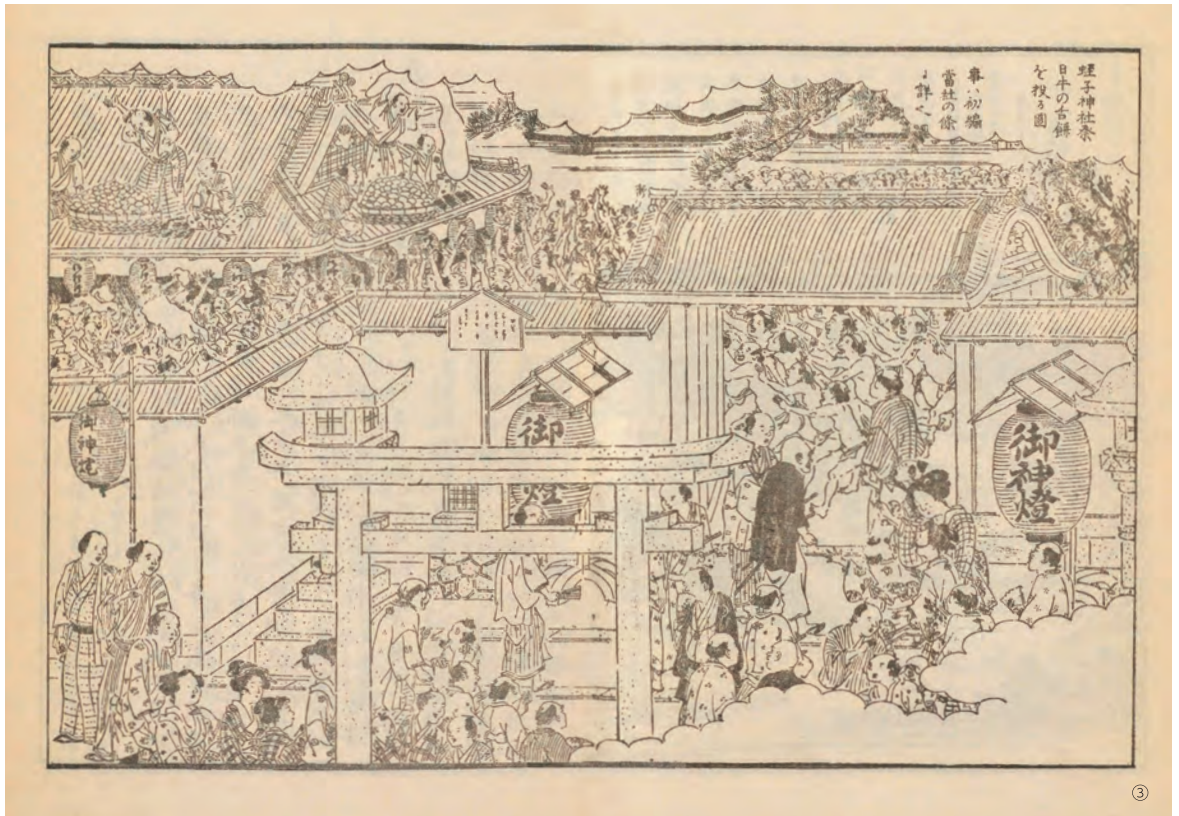
院である「御池坊」が焼失し、紆余曲折を経て再興するまでを描いた絵巻である。そして、再建を祝って餅まきをしている場面が、そのフィナーレを飾っている。

御池坊が焼失したのは1486年、描かれているのは室町時代の出来事である。絵巻が成立したのは江戸時代の後半なので、室町時代に実際に餅まきが行われていたかどうかは分からない。しかし、少なくとも描いた人がそう考えていたことは間違いないだろう。江戸時代の紀州では、「建物が完成したら餅まき」が、共通認識となっていたということだ。





- ① 粉河寺御池海岸院本尊縁起「御池坊が再建され、餅まきで祝う場面が描かれている。
- ② 粉河寺御池海岸院本尊縁起「下絵
- ③ 「紀伊国名所図会」蛭子神社祭日午の舌餅を投る図



江戸時代の終盤に成立した『名所図会』には、水門吹上神社（和歌山市）の餅投げの風景が描かれている。「牛の舌餅」という大きなのし餅を屋根の上から投げ、多くの人が群がるその様子からは、人々が待ち望んだ一大イベントだったことがうかがわれる。

戦後の盛り上がり

そんな餅まきイベントも、戦時中には中止されることになった。その後、全国的にはあまり見られなくなったが、和歌山では、戦後の復興にあわせて、各地でこれまで以上の盛り上がりを見せることになった。

農業にかかわりの深い新嘗祭や初午などの祭りに加え、建物が完成した時の上棟式、地蔵盆の厄除けなど。その場面は宗教行事だけにとどまらず、年中、どこかの場所で餅



水門吹上神社の餅投げ

が投げられている。

アフターコロナへ

ここ数年は、新型コロナウイルスの影響で、中止を余儀なくされた餅まきも多い。しかし、その間にも、開催を求める県民の声は多いという。

水門吹上神社宮司の小島清藏さんは「毎年、祭りの時期になると問い合わせがある。来年は必ず開催したい」と意欲を見せる。餅まきの復活が、アフターコロナの盛り上がり、に勢いをつける日も近い。

もちが拾える場所

年中どこかで餅投げが開催されている和歌山では、季節ごとに会場を渡り歩くことを趣味にしている人も珍しくない。ほんの一部ではあるが、県内の「拾える場所」を紹介する。

立神社

海南市

5月3日の春祭で「大投餅」が開催される。各字から持ち寄られる餅は7石(約1050kg)以上の餅を、2時間にわたって投げ続ける。



氷門吹上神社

和歌山市

11月23日の新嘗祭で開催される。境内のやぐらの上から3俵(約180kg)の餅が投げられる。名物の「牛の舌餅」は「昼ほどのサイズ。かつてはそのまま投げていたようだが、現在は神前に供えたあと、細かく切り分ける。



番外編

須佐神社

有田市

番外編として、須佐神社の例祭を紹介したい。こちらでは、祭典終了後に、神前に供えた鯛を投げる。奪い合う激しい様子から、「千田のけんか祭り」の異名がある。10月14日。



くるみもち

伊都地方の秋祭りの時期につくられた。枝豆やクルミ、ゴマの餡でもちをくるむ。



わかやまの もち文化

平野が広く、稲作に適した紀ノ川流域と、山と海が迫る熊野灘沿岸。北部南部で環境の異なる和歌山では、それぞれ独自の「もち文化」を築いてきた。

いももち

平地の少ない熊野灘沿岸では、米にかわる主食としてサツマイモが食べられていた。いももちは、より少ないもち米で多くのもちをつくる方法として発展した。



出典：農林水産省Webサイト

雑煮



和歌山の雑煮は焼かない丸もちで、白みそ仕立てが一般的。しかし、かまぼこに使う魚のエソで出汁をとる(有田市)、鮎で出汁をとったすまし汁(田辺市龍神)、鮎の干物で出汁をとる、焼いた切りもちを入れる(すさみ町)など、地域独自の雑煮もある。

いのこもち

紀ノ川流域では、秋の収穫が終わった亥の日に供える風習があった。田辺市でも秋祭りにつくられる。「いのこもち」とも。小豆のあんをもちにまぶす。



出典：農林水産省Webサイト

糸切餅

射箭頭八幡神社(和歌山市)前の茶店で、昭和初期まで名物として売られていた。江戸時代の『紀伊国名所図会』には、「糸切餅屋」の項が設けられている。同社の由緒にある、神功皇后に弓弦で切って献上したという故事にちなむ。



ポッポ みちをゆく —有田川町—

有田川町にある「ポッポみち」は、
旧有田鉄道の廃線跡で、JR藤並駅から
有田川鉄道公園までの5.2kmを結ぶ。

有田鉄道は、有田川流域の木材やみかんなどを運搬
するために大正5年(1916)に運行を始め、旧吉備
町(現有田川町)の金屋口から積出港だった湯浅港を
結んでいた。輸送手段がトラックに変わったあとも、学
生を中心として地域住民の生活の足であったが、平成
14年(2002)に廃線となった。

廃線跡は歩道・自転車専用道路として整備され、現在
では「絵本のまち有田川」として絵本を活用したまちづ
くりに取り組む町のシンボルロードとなっている。

鉄道公園へのアクセス

電車・バス

JR藤並駅(きのくに線)より路線バス約12分
「こころの医療センター前」下車

自動車

阪和自動車道有田ICより金屋・清水方面へ約10分



⑥ 御霊駅跡 (ごりょうえき)

立派な駅舎が残っており、
内外の壁面は複数の絵本作家
によるペイントでにぎやか。



⑥ 御霊駅跡

有田川鉄道公園と 有田川町鉄道交流館



⑦ 有田川鉄道公園と 有田川町鉄道交流館 (有田川町徳田124-1)

有田川沿いの芝生のある公園に
鉄道車両を保存、乗車体験ができる。
園内の鉄道交流館では有田川町を
再現したジオラマが人気。



ポッポみちは単に通過するだけの道ではなく、本のあるカフェをコンセプトにした「地域交流センターALEC」を中心に、絵本を読んだり絵本作家の絵を楽しんだりできる地域の憩いの場となっている。みかん畑や民家が立ち並ぶ平坦な道沿いは、いくつか「まちかど絵本箱」として絵本箱が設置されている。訪れた人が自由に読んだり借りたりできるのだ。また残されている旧駅舎の壁面は、それぞれ絵本作家によるペイントが施され彩り豊かだ。

有田鉄道の終点であった旧金屋口駅の周辺は「有田川鉄道公園」となっており、公園入口ではD51形蒸気機関車が出迎えてくれる。ほかに往年の車両が展示保存され、休日には鉄道の乗車体験もできる。併設する鉄道交流館には、有田川町を再現したジオラマがあり、鉄道模型を自分で運転することもでき、鉄道好きはもちろん家族連れでも楽しめる。

ウォーキングやサイクリングなどに、ぜひ一度訪れてみてはいかが。



480

有田川

⑤ 下津野駅跡 (しものえき)

有田中央高校(旧吉備高校)と、吉備町役場(現在の有田川町役場)の最寄り駅だった。ホーム跡に白いベンチがあるが駅舎は残っていない。



③ 田殿口駅跡 (たどのぐちえき)

石垣のようなホームと駅舎跡。東屋の下にベンチと可愛い絵本箱がある。

宗祇通り



② 野田の宝篋印塔 (ほうきょういんとう)

県指定文化財。南北朝時代の、貞和2年(1346)造立の宝篋印塔。高さ321cm。

③ 田殿口駅跡

④ 地域交流センターALEC

⑤ 下津野駅跡 ポッポみち

22

④ 地域交流センターALEC (アレック) (有田川町下津野704)

一般書約40,000冊、漫画約35,000冊の蔵書を誇る交流施設。カフェやイベント会場を併設。



② 野田の宝篋印塔

42

有田IC

① JR藤並駅

① JR藤並駅
かつては有田鉄道の駅もあった藤並駅。東側1階には有田川町観光案内所があり、ポッポみちは紀勢線に沿って北方へ延びている。





ハレの日を彩る 印染の世界

青空に映える極彩色の大漁旗
 社寺の幕や祭礼で着る法被^{はっぴ}
 万国旗から商店の幟や暖簾など^{のぼり のれん}
 染物職人によって生みだされた
 「印染」^{しるしぞめ}に触れる。



平安時代から続く印染

全国各地に紺屋町や染師町などの地名があり、昔から染物屋は日本の伝統文化の一翼を担っていた。一口に染物と言ってもさまざまで、家紋や屋号などを染め抜いたものを「印染」という。遠目でも分かるよう図柄を「くつきり」と染め上げるのが特徴だ。その歴史は諸説あるが平安時代にまで遡る。牛車に所有を表す紋が入れられたことに由来し、戦いの場では敵味方を区別する旗印が掲げられた。江戸時代に綿織物産業とともに

大きく発展し、戦前には印染業者が全国で1万4000社を数えるまでに。現在では300社を下回るまで減少し、20年後には100社ほどになると危惧されている。



“しるし”が示すもの

家紋や屋号の入った袴纏はんでんは、職人や商家の使用者の仕事着であり、誇りをもつて身に着けた。また「暖簾を守る」という言葉があるように、家紋や屋号を掲げることは商いの目印というだけでなく、店の格式や信用を表すものだった。さらに旗印は、国や会社を示す国旗や社旗などに発展している。

では生まれない。現在も、存在を示す宣伝や周知に使われている。

民俗文化を担う職人

御坊市の染道祥博そめみちよしひろさんは「そめみち染物旗店」の3代目。同店は、もともと本家で染物職人をしてきた祖父が昭和23年（1948）に創業したのが始まりで、かつては御坊市内に親戚が営む工房が3軒あった。

されるため、長年の経験や知識に基づいた職人技が際立つ仕事だ。注目の約8割を占める御坊日高エリアは祭礼が盛んで、社寺幕や幟旗から伝統芸能の衣装、獅子舞の胴幕など代々受け継がれるものを依頼される。印染を通じて地域の民俗文化も残していく役割を担っているのだ。

伝統を守り革新に挑む

“しるし”は自分が「何者であるか」を他者に示すもので、これが印染の本質だろう。地域の祭礼にも印染は欠かせず、揃いの法被に身を包んだ時の高揚感是他

染道さんが店を引き継いで、大きく変わったのはデジタル化だ。パソコンでデザインし、プリンタ出力もする。顧客の要望に合わせて最適な染色方法を選択し、伝統的なものとの融合や棲み分けをしている。

を人々に伝えている。またオリジナル商品の開発や、SNSを活用した情報発信や販路拡大などにも意欲的だ。伝統的な職人の枠にとどまらず、新たな可能性を探って立ち止まらない染道さんの挑戦は続く。



を生地の上に置いてスキージという大きなヘラで染料をのばし1色ごとに染める。どちらも気温や湿度に左右



染料の配合は無量大



色ごとに変える刷毛



過去の調合をレシピ化



SOMEMICHI.COM
Since 1948

そめみち染物旗店

〒644-0003 和歌山県御坊市島644-3
TEL:0738-22-0915
<https://somemichi.com>





棕櫚箒製作舎

西尾 香織さん



産地で継承『和歌山の底力』

今回は広島県(広島市)出身でしゅうほうき棕櫚箒職人の西尾香織さんに、
伝統産業の担い手の視点から和歌山の魅力を語ってもらった。

最初は

デザインの仕事

広島市出身の西尾さんは、地元でデザイン事務所に勤めていたが、退職を機に「自分の住みたいところで仕事をしたい」と移住先を探していた。

和歌山を初めて訪れたのは2002年(平成十四年)頃。友人を頼って旅行がてら訪れたが、景観のよさと海が近いところが気に入った。友人の知り合いが住む場所と仕事を紹介してくれ、トントン拍子に移住が決まった。
当初は和歌山市で印刷会社のデザインの仕事を担当。棕櫚箒についてはまったく知らなかった。

棕櫚箒との出会い

和歌山が好きで移住してきたというのもあり、最初の仕事では観光ガイドの仕事や任された。その資料として和歌山の歴史や伝統工芸品などを調べる事になり、そこで後に師匠となる棕櫚箒職人・桑添勇雄さんの存在を知る。

高い技術で作られた箒に心惹かれると同時に、後継者のいない現状を知り、棕櫚箒作りを学びたいという思いが高まっていった。
初めは余所者である自分でもいいのかという迷いもあった。しかし桑添さんが高齢で技術の継承に時間がないことや、棕櫚箒の仕事に理解を示してくれた夫の後押しもあり、2000



6年(平成十八年)に桑添さんに弟子入り、翌年に紀美野町の定住促進事業を利用して転居。
その後、5年の修行期間を経て独立を果たす。西尾さん以前にも桑添さんには何名かの弟子がいたが、皆技術を習得する前に諦めてしまい、棕櫚箒職人として独立できたのは西尾さんが初めてだった。

変わらない

ことが魅力

「和歌山に移住して20年になるが、土地が持つ美しさ・風土が変わらず底力を感じる。また少し不便なところも秘境感があり素敵だと思う」と語る西尾さん。広島市の実

家は埋立地にあり、歴史のある土地には憧れがあったという。

棕櫚箒の仕事にも長い歴史がある。自分が技術を継承することで、その歴史を少しは留める事ができた。形だけなら残していくことも可能かもしれないが、本物の技術は

何年も教わり習得する事でしか身につかない。

だからこそ、独立後も紀美野町を離れる事は考へなかつた。それには高齢の師匠の近くで助けになりたいということもあつたが、地域の伝統産業としての棕櫚箒の文化を守りたいという思いもあつた。

「何も足さず、

引けない」

かつて紀美野町周辺には20万本以上の棕櫚の木が生えており、地域の棕櫚製品産業を支えていた。しかし、ほとんどの棕櫚がヒノキなどに植え替えられ、現在、棕櫚箒作りは中国からの輸入原料に頼っている状態だという。さらに、輸入原料でも棕櫚箒に適したものが少なくなつてきており、いつまで続ける事ができるのか不透明なのが現状だ。だからといって、諦めるわけには行かない。

て欲しい箒も異なる。棕櫚箒の柄には基本的には黒竹を使用しているが、洋風の家に合う様ヒノキを使う事もある。ただし、全ての要望に応えるわけではなく、良くなるのであれば改良を加えていく。それは師匠である桑添さんの姿勢でもある。理想は何も足さず、何も引けない、全てに意味がある形。理想を求め、西尾さんの探究は続く。



西尾 香織

1976年、広島県出身。広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科卒業後、地元のデザイン事務所に就職。2002年、和歌山県の風土に魅せられ転居、印刷関係の仕事に就く。2006年9月、棕櫚箒職人・桑添勇雄さんに弟子入り、見習い職人として働きはじめる。2012年、棕櫚箒職人として独立。棕櫚箒製作舎をはじめる。

日本にはさまざまな伝統産業があるが、技術だけが流出して、産地が縮小してしまうことは珍しくない。できるなら地元で技術を身につけたいというのが西尾さんの願いだ。

伝統を守る事は大事だが、それに縛られてはいけない。現在は住環境も多様で、お客さんによつ



棕櫚箒製作舎 URL <https://shurohouki.jp>

人が集い、想いを紡ぎ、新しい流れをつくるまち

有田川町長 中山 正隆



私たちのまち、有田川町を東西に流れる有田川は、弘法大師・空海によって開かれた日本仏教の一大聖地、高野山を源とします。有田川流域と高野山とは、古くから信仰と経済の両面で深い結びつきがあり、空海にまつわる数々の足あとと伝説が、まちの各所で語り継がれているほどです。

2021年、当町は「聖地 高野山と有田川上流域を結ぶ持続的農林業システム」「有田みかんシステム」という2つの日本農業遺産に認定されました。前者では日本一の生産量を誇るぶどう山椒が、また下流域となる後者では、その名のとおり一大産地となる有田みかんが栽培されています。

2002年末に廃線となった有田鉄道の跡地を整備した「ポツポミち」は、JR藤並駅から有田川鉄道公園までを結ぶ全長5.2kmの歩行者・自転車専用道路。道沿いには本のあるカフェALICEや絵本作家がペイントを施した駅舎跡、様々な形をした絵本箱などがあり、写真スポットとしても人気です。ぜひ有田川町へお越しください。心よりお待ちしております。



▲御霊駅跡



▲藤並駅付近の壁画

編集後記

『ほうぼわかやま』では21号から、「ものづくり at わかやま」の連載を続けています。その取材で必ず登場するのが「伝統」という言葉。蓄積された知識と経験に基づく確かな技術があって、初めて成り立つ仕事だという厳しさが伝わるワードです。

それに加えて、最近では「変化に合わせる」「知ってもらう」といったフレーズの登場頻度が増えました。「いいものをつくっているんだから」とあぐらをかいては通用しない時代になったということでしょう。今回掲載した染物店でも、伝統の技術とデジタルの融合や、スポーツチームとのコラボに取り組んでいます。11月には30代の若い経営者が中心となって、「和歌山ものづくり文化祭」が開催されました。

そういう動きを紹介し、地域の魅力向上につなげることも、私たちのような情報誌の重要な役割です。しかし、ここでひとつ懸念事項があります。それは、はたして自分たちはあぐらをかいてはいないかということ。これまで発行してきたスタイルを守るだけでなく、知ってもらう努力を続け、変化を恐れずに挑戦することができているでしょうか。あらためて、「原稿づくり」の態度を見つめ直しています。

そのためにも、読者の皆さまからの声は大変貴重です。右側のQRコードから、ぜひ感想をお寄せください。

編集長 宇治田 健志

『ほうぼわかやま』発行について

和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で2008年から年2回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。

設置場所：和歌山市内のコミュニティーセンター、県内の図書館、TSUTAYA WAYなど詳しくはホームページをご覧ください。

ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。

詳しくはウェブで検索→ <https://w-i-n-g.jp> **ウイング 和歌山**

協力機関 本誌を作成するにあたり、次の機関・団体にご協力をいただきました。(順不同・敬称略)

和歌山県神代庁、和歌山県立紀伊風土記の丘、和歌山県立博物館、宗教法人粉河寺、水門吹上神社、有田川町、そめみち染物旗店、棕櫚帯製作会

アンケートで
当たる!!

感想をお寄せいただくと…
抽選で10名様に
そめみち染物旗店様の

『雫シリーズ祝儀袋(ハンカチ)
もしくはコースター』をプレゼント!

※絵柄は選べません

こちらから感想を
お寄せください!→

メ切 2023年3月末日



印刷物を中心に広報活動をお手伝いする会社です。「ほうぼわかやま」の発行や本づくりを通じ、文字による地域文化の振興を目指しています。就職応援BOOK「COURSE (コース)」や、キャリア教育本「さくらノート」も発行しています。[沿革] 創業 1972年。設立 1981年。

[facebook](#) [いいね!](#)

27号8頁の「1953年(昭和二十六年)」は「1953年(昭和二十八年)」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。